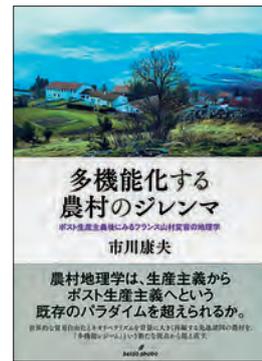


『多機能化する農村のジレンマ： ポスト生産主義後にもみる フランス山村変容の地理学』

市川 康夫 著

国際領域 研究員 服部 麻子



この本はフランスの農業と農村が、1960年代から2010年代における自国の農業政策と補助金制度の変遷に伴い「多機能化」していったいきさつを人文地理学の現地調査結果を踏まえて三部構成で論じています。第一部は先進国における農業、農村変容の捉え方と、現代農村を分析する視点である多機能論の概念と方法や多機能論が登場した経緯を記した理論を展開します。続いて第二部では農業政策の変遷に伴い、フランス山地農家が条件不利な環境下で農業所得を維持するためにいかなる経営戦略を採用してきたのかをフランス中央高地、メザン地域の畜産農家を対象に実施した聞き取り調査の結果を踏まえて具体的に説明しています。そして第三部では、

- ・地域ブランド（メザン地域の畜産伝統と生産者の誇りを反映した「ファングラ・ド・メザン（ファングラ牛）」の地理的表示取得）
- ・ツーリズム資源（「宝島」の小説家が切ない恋心を癒すために南仏、地元の山々をロバと歩いた放浪記に書かれた実在する旅路を長距離ハイキング客向けに民間協働で整備）
- ・田園回帰（フランス、ジュラ地方でワイン造りが盛んな某農村へのIターン）

という3つのテーマを現実味にあふれる形で聞き取り調査や事例紹介を交えて紹介しており、学術書でありながらフランス農村を旅する気分で読むことができます。

この本を「読む旅」をしていたら、農村というのは農業という「生業」を遂行するだけの場所ではない。暮らす、旅する、日々そこで過ごす人々の生業が時とともに歴史と伝統を築き、無数のドラマが生まれ続ける「舞台」であるということをもふと思いました。

著者はこの本が紹介する農村の多面的機能を「新たな機能」と位置付けて紹介していますが、それは本当に「新たな」機能なのでしょうか？むしろ、本来農村に自然な形であったはずなのに農業の経済的効果を追求する過程で人々が忘れがちになったり、あるいは気付く機会が減ってしまったりした既存の機能なのではないでしょうか。

本稿に繰り返し登場するメザン地区は、時が止

まったままのような古い建物が点在し、春の訪れとともに牧草地に花が咲き乱れる高原地帯で家畜たちが優雅な

毎日を送る、これぞフランスの「桃源郷」です。私も何度も訪れていますが、行くたびに、なぜこんなに不便で、かつ寒い冬が長く続く生産性の低い土地に人が住み続けたのだらうと思うのも事実です。

著者はそのような地をあえて選んで、農家28世帯分の家族構成と年齢、家畜の飼育頭数、耕地利用面積と利用目的別比率だけではなく、各農家の経営支出等、「お金の話」まで、綿密に聞き取り調査を行い簡潔にまとめています。

文中には各農家が受け取る共通農業政策補助金とその内訳である単一支払い、条件不利地域支払、環境支払い、家畜頭数支払いの比率を示した図があります。この図を、後継ぎ次男が補助金をもらって就農した、経営主が結婚して子供が生まれた、夫が病気で農業を早期引退した、EUの乳量割当制度で配分された乳量が期待外れで少なかった、補助金制度が変わった…、だから複合経営から酪農専業に転身した、酪農を止めて肉牛専業に転身した、レンズマメ栽培を有機ではじめた…といった事例の紹介と照らし合わせて見てみましょう。すると過疎地に残った農家それぞれが世代交代等の節に合わせて「使える」補助金を組み合わせる離農者が残した土地を吸収し、規模拡大し、苦勞と工夫を重ねてこの地で暮らしてきたこと、そして、各時代における政策の方針に合わせた農業様式を選んだ方が効率よく補助金がもらえるという仕組みに彼らが導かれてきた輪郭が、しだいに浮かんできたような気がします。

「規模が大きな経営体ほど経営支出に占める農業機械費と貸付返済金が高い」「環境遵守は大切だが現場の実状に合わない規制と書類提出ばかりが増えて困る」…そういう話題はフランスの田舎に住む友人知人からも散々聞いたな、と自分の過去を顧みながら本を閉じたら、「知ってるか？我々が誇るブランド牛肉「ファングラ・ド・メザン（ファングラ牛）」は神戸ビーフに引けを取らない霜降りの美味しい肉だ」と地元の人に会うたびに自慢話を聞くことになるあの「桃源郷」に、また戻りたくなりました。ええ、もちろん、この本をかばんに詰めて…。

『多機能化する農村のジレンマ：ポスト生産主義後にもみるフランス山村変容の地理学』
著／市川 康夫
出版年／2020年
発行所／勁草書房